

— 1 — 謝靈運の「初めて郡を去る」詩

謝靈運の「初めて郡を去る」詩

彭薛裁知恥 彭と薛とは裁かに恥を知り
 貢公未遺榮 貢公は未だ榮を遺れず
 或可優貧競 或は貧り競ふことより優れたりとす可きも
 豈足稱產生 豈に達生と稱するに足らんや
 伊余秉微尙 伊に余れ微尙を秉り
 拙訥謝浮名 拙訥にして浮名を謝らんとす
 廬園当棲巖 廬園は棲る巖に当たり
 卑位代躬耕 卑位は躬ら耕すに代はる
 顧己雖自許 己を顧みて自ら許すと雖も
 心迹猶未并 心と迹は猶ほ未だ并はず
 無庸妨周任 庸無くして周任を妨げ
 有病像長卿 病有りて長卿に像たり
 畢娶類尙子 娶るを畢はるは尙子に類
 薄遊似邴生 薄か遊ぶは邴生に似たり
 恭承古人意 恭しく古人の意を承け
 促裝返柴荆 装を促して柴荆に返らん
 牽絲及元興 絲に牽かるるは元興に及び
 解龜在景平 龜を解くは景平に在り

負心二十載 心に負くこと二十載
 於今廢將迎 今に於て將り迎へを廢す
 理棹遄還期 棹を理り還る期を遄め
 遵渚鶩修垆 渚に遵って修き垆を鶩す
 遡溪終水涉 溪を遡り終ひに水涉りし
 登嶺始山行 嶺を登り始めて山行きす
 野曠沙岸淨 野曠しくして沙岸淨く
 天高秋月明 天高くして秋月明らかなり
 憩石挹飛泉 石に憩ひて飛泉を挹み
 樊林攀落英 林を樊きて落つる英を攀る
 戰勝瞿者肥 戰勝ちて瞿せたる者肥へ
 鑑止流歸停 止まるに鑑みて流れ停まるに歸す
 即是義唐化 是の義唐の化に即いて
 獲我擊壤情 我が擊壤の情を獲たり

右の詩は、その題にも示す如く、謝靈運が、左遷された永嘉郡（浙江温州）の太守を辞任して去る道中の詩である。そもそも彼が永嘉郡の太守となったのは中央の太子左衛率からの左遷であり、追放でもあった。劉裕が、天下を取って宋と

小 尾 郊 一

号した時、謝靈運を遇するのは必ずしも厚いとは言えなかつた。劉裕から見れば、謝靈運は豪族謝家の一員であり、前朝晋の功臣の家でもあって、一目を置かざるを得ない人物である。あまつさえ自分の対抗人物劉毅に仕えたものであつてみれば、好ましくない存在と考えるのは当然のことである。政治の中核に参与させようなどとは毛頭も考えなかつたに違いない。ただ前朝に於て外敵の侵入を防いだ功臣の子孫としていささか遇し、且つ文学の才があるという点に於て彼を認めるに過ぎなかつた。しかも彼は「性褊激にして、多く礼度を愆る」(宋書本伝)人物であつてみれば、実際の政務を担当させるわけにはゆかなかつたらしい。ところが靈運の方から見ると、自分は豪族の家柄であり、この家柄の繁栄を謀るためには、政治的にも経済的にも、その地歩を固める必要があつたこというまでもない。それがかなえられず、しかもその才能ありと自認しているものが認められなかつたのであるからここに憤懣が出てくるのは当然であろう。このことを彼の本伝では「自ら謂へらく、才能宜しく權要に參すべし」と。既に知られざれば、常に憤懣を懷く。」と記している。

天子劉裕に認められぬ憤懣から、自然に謝靈運は裕の次子義真と結託することになった。これは靈運の方からも何か利用しようとしたのである。うし、義真の方にも野心があつて靈運らを利用しようとしたのかも知れぬ。この一味にはほかに文人の顔延之、僧侶の慧琳がいた。彼らの行動は不穩であ

り、何かを企てていたことは、劉義真の「志を得るの日に、靈運、延之を以て宰相と為し、慧琳を西豫州都督と為さん」(宋書、劉義真伝)といったことばによって推察される。この不穩な空気を見抜いて、心好く思わなかつたのが、野心家の実力者徐羨之である。彼は義真一党を解散させようとし、先ず義真を廢する上奏文を上り、ついで殺してしまふ。そして顔延之は始安の太守に、靈運は永嘉の太守に、慧琳も建康をそれぞれ追放されることになった。靈運には永嘉の太守として赴任する時の詩が残っている。「永初三年七月十六日、郡に之かんとし、初めて都を発つ」詩がそれであり、時に靈運三十八歳のことである。

これから一ケ年、太守として永嘉にあるのであるが、この時の彼の心中は憤懣に満ちていたこと推察に難くない。宋書の本伝には永嘉時代を簡略に次の如く述べている。

郡に名山水有り。靈運の素より愛好する所なり。出でて守となり既に志を得ざれば、遂に意を肆にして遊遨す。徧く諸懸を歴、動もすれば旬朔を踰ゆ。民間に訟を聴くこと、復た懷に關けず。至る所輒ち詩詠を為り、以て其意を致す。郡に在りて一周りし、疾と称して職を去る。

また永嘉時代に作られた二十首余りの詩によって、彼の心中が那辺にあつたかつぶさに知ることが出来る。彼はしばしば失意の寂しさを訴え、故郷の始寧に退隱したいと希望している。

— 3 — 謝靈運の「初めて郡を去る」詩

さてその宿願が達せられて、ここに太守の職を放擲して、故郷の始寧に帰る時の詩が、冒頭の「初めて郡を去る」詩である。この詩にはしたがって、太守の職を辞して自由の身となることができる喜びの心境を歌っていることが予想される。

先ず最初の四句では漢の彭宣、薛広徳、貢禹の出处進退に批評を加え、かれらの行動を一応は是認しつつも、しかし「達生」の道理を会得したものとはいえないといい、次の六句では、太守の職について、隠遁者と同じ気持でいるが、それでは名実一致しないから辞職したいという。更に次の六句は、自分の現在の状態は、周任らのような古人とよく似ている。それを思えばますます隠遁して故郷に帰らねばならぬといい、そして次の四句は、過去の二十余年の官吏生活は、自分の本志でなかったことを述懐し、今やわずらわしい役人生活を断乎やめてしまったと述べる。

この詩で彼が心境を述べるとすれば、以上で大体尽きていように思う。されば彼は「今に於て將^かり迎へを廃す」といって、彼の述懐に一応の終止符を打っている。述懐の詩としては以上二十句で十分であるようにも感ぜられる。ところがこの詩に於ては、次に突如として故郷に帰る道中の叙景がなされている。「棹を理めて」の句より、「林を樊きて」の句に到るまでがそれである。この詩の半分以上を費して辞任に到る心境を述べて、突如場面は変って、旅の道中の風景となる。そしてまた最後に場面は一転して再び彼の述懐となる。

即ち最後の四句では、断乎退隱を決意し、再び仕官生活に牽かれぬことをいって、以後上古のような「帝力我に於て何か有らん」という生活を送りたいものだという。この最後の述懐はいわば前半のしめくりとして述べられているようでもあって、いささかもすぐ前の叙景とは結びつかない。つまり映画で譬えるならば、最初の二十句は、謝靈運が永嘉の官舎で一人感慨に耽っている姿が大写しにされているところと見られよう。次なる叙景の八句は、溪流を遡り、山道を歩く旅の道中の姿が、移動カメラが捉えていると見られよう。最後の四句は、とあるところに休息してかなたを眺めながら感慨に耽っている姿が想像される。一連の画面であり、中心になるのは作者であるが、その背後になるものが異なり、場面、場面は急激に転換している。これがこの詩の大きな特色であり、また謝靈運の詩全体を通じて、極めて顕著にみられる特色である。場面と場面というのは、換言すれば抒情と叙景とということでもある。そしてその排列は概ね叙景が先で抒情が後である。その叙景と抒情は概ねは交錯しない。伝統的な描写法としては、詩経が示す如く先立つ叙景から次なる情が導き出されたり、或いは又叙景は抒情の背景となって重なりあったりする。詩経の例はあげるまでもなからう。後者の例をあげよう。晉の左思の「雜詩」に

秋風何冽冽、秋風何んぞ冽々たる

白露為朝霜、白露朝霜と為る

柔條旦夕勁 柔き條は旦夕に勁く

綠葉日夜黃 綠の葉は日夜黄ばむ

明月出雲崖 明月雲崖より出で

嘖嘖流素光 嘖々として素光を流す

披軒臨前庭 軒を披き前庭に臨めば

嗷嗷晨雁翔 嗷々として晨雁翔く

高志局四海 高志四海に局かまられ

塊然守空堂 塊然として空堂を守る

壯齒不恒居 壯齒恒には居らず

歲暮常慨慷 歲暮常に慨慷す

とあるが、右の「嗷々晨雁翔」までは秋の景色であって、人をして楽しませる景色ではない。草木黄落の秋である。作者はこの景色をみて「壯齒は恒には居らず」「塊然として空堂を守る」感慨を催す。この秋の景色から感慨が引起されたものである。感慨を起す作者の背後には秋の景色がある、叙景の部と抒情の部とは重なりあって、全篇は抒情詩として見ることが出来る。

ところが謝靈運の詩は叙景の部と抒情の部とははっきり対立している。先にあげた例をとってみると、中間に位する秋の叙景と後に来る感慨とは殆んど無関係である。秋の叙景から後の感慨が導き出されることはない。少くも読者にとってはその感ずる。むろん作者にあっては一連の詩である以上、この叙景から後の感慨が導き出されたことと思うが、作者は

これを従来の如く強く結びつけず殆んど無関係の如く歌っている。この描写法こそ謝詩の一つの特色であると考へたい。

こうした描写法をしているものに、なお「鄰里相送至方山」

「過始寧墅」 「富春渚」 「過白岸亭」 「遊赤石進帆海」 「登

永嘉綠嶂山」 「遊嶺門山」 「田南樹園、激流植援」 「石門新

營所住、四面高山、廻溪石瀨、茂林脩竹」 「石壁立招提精

舍」 「入東道路詩」 「登石門最高頂」 「石門巖上宿」 「石室

山」 「入彭蠡湖口」 「發歸瀨三瀑布望兩溪」 「從京口北固亭

詔」などがある。これらの詩は景色を歌ってはいるが、その

景色から何かが比喻されたりするものではない。またその景

色には悲哀とか歎喜の感情が投影されているものでもない。

つまり叙景は叙景として独立し、感慨を述べる部分は、それ

として独立したものと見なされる。この描写法は謝靈運の詩

の一つの大きな特色といわなくてはならない。

右の例は叙景と抒情と対立しているものを挙げたもので、謝靈運の詩全体から見れば、約半数がそれである。あとの半数は叙景の部と抒情の部が何らかの意味で関係ありと認められる詩である。ただその関係の仕方があまり密接でないといえよう。叙景と抒情が深く交錯しない、或いは密接に重なり合わぬということができよう。例えば次の詩は永嘉の太守に在任中、永嘉郡の南亭に遊んで、初夏の夕方の景色を眺めながら、時間の推移を感じ、はては故山に隠棲したい希望を述べたものである。

「南亭に遊ぶ」

時竟夕澄霽 時竟りて夕澄み霽れ

雲帰日西馳 雲帰り日西に馳す

密林含餘清 密林餘清を含み

遠峯隱半規 遠峯半規を隠せり

先づ初夏の夕方、雨後の澄んだ景色を描写する。陳倩父が

「真景目に在り、晝も及ぶ能はず」と評する如く、真景が浮び、それこそ絵の様な景色が想起される。ここには作者の美意識だけが感ぜられ、喜怒哀楽の感情の影は微塵も感ぜられぬ。後の唐詩などを見ると、夕陽の描写には何か感傷を感じさせるものが描写されているが、ここにはそれが見られない。

久痾昏墊苦 久しく昏墊の苦しみに痾み

旅館眺郊岐 旅館にて郊岐を眺む

永雨から解放されて野外を眺めると、

沢蘭漸被徑 沢の蘭は漸く徑を被ひ

芙蓉始發池 芙蓉始めて池に発く

陳倩父の評に随えば「沢蘭の二語は、漸の字始の字始の字有れば、則ち被の字発の字始めて活く。短より長じ、苟より長じ、物色生動す」である。「此れ康楽の擅場にして、他人の能はざるなり」であるかどうか分らないが、少くも「物色生動する」が如く感ぜられることは事実である。作者は沢蘭、芙蓉の眺めに初夏を感じ

未厭青春好 未だ青春の好きに厭かざるに、

已観朱明移 已に朱明の移れるを観る

と歌い、時間の推移を覚える。初夏の景色に時間の推移を感じ、

感感感物歎 感々として物に感じて歎き

星星白髮垂 星々として白髪垂る

と云って衰老の歎きを歌うのであるが、従来の詩であるならば「物に感じて歎く」場合には、歎くにふさわしい風物が描かれの常であった。晉の張載の「秋」の詩にしても、「物を観て時の移るを識り、己を顧みて節の変するのを知る」と歌うのは、草木の黄落する秋を見たためであり、詩には詩人を感動させるにふさわしい秋の描写がなされている。だがこの謝靈運の詩に於てどうであろうか、「物に感じて歎く」にふさわしい風景の描写がなされていない。「沢蘭漸く徑を被ひ、芙蓉始めて池に発く」は、初夏の風物で、この表現には何ら作者の感情の投影は無い。いうまでもなくこの表現は本づく所がある。沢蘭の句は楚辞の招魂の「皋蘭徑に被りて斯の路漸れぬ」に本づき、芙蓉の句は同じく「芙蓉始めて発き、菱荷を雑ふ」に本づくものであり、いずれも春の景色の如くであるが、この招魂自体の描写には特に傷心を催させるようなものはない。ただ前者は招魂の乱にある句で「朱明夜を承け時は以って淹む可からず」を承けて「皋蘭は徑に被り斯の路漸る」と歌い、続いて

湛湛たる江水上に楓有り

目は千里を極めて春心を傷ましむ

魂よ帰り来れ江南を哀しむ

と結ばれている。つまり阜蘭とか江水とか楓は春の物であり、作者にとっては春心を傷ましめるものとして写る。またもう春が来たという感慨を催すものでもある。その意味まで含めてここでは使っているとすれば下の「未だ青春の好きを厭はざるに、已に朱明の移るを覩る」という句が出て来るのも理解できぬこともない。しかし芙蓉の句にも招魂では何ら感慨を催す情はこめられてはいない。考えてみるに、沢蘭にしても招魂においては描写自体にはそう強い感慨がこめられていると見られない、春のあたりまえの風景であると見てもよい。謝詩においても招魂にもとづきつつ、春のあたりまえの風物を詠じたものと考えてよからう。つまり「感々として物に感じて歎き、星々として白髪垂る」と歌うほどの気持を反影するものが、前の叙景にはない。やはり前述の晉代の詩と比べてみると「物に感ずる」描写が異なる。謝靈運は続いて歌う

藥餌情所止 藥と餌とは情として止む所に止

衰疾忽在斯 衰と疾とは忽ち斯に在り

逝將候秋水 逝に將に秋水のころを候ちて

息景偃旧崖 景を息めて旧崖に偃さんとす

我志誰興亮 我が志誰と與にか亮にせん

賞心唯良知 賞心のみ唯だ良知なり

衰疾の身であるから、秋になつたら故郷に隠棲したいといふ。この後の感慨は叙景から導き出されたものではあるが、前の叙景にはその感慨にふさわしい抒情的描写がなされてはいない。やはりこれは謝靈運の詩の一特色といつてもよからう。

もつとも謝靈運の詩には、感慨を催すにふさわしい「物」が詠じられぬではない。「七里瀨」

羈心積秋晨 羈の心は秋の晨に積もり

晨積展遊眺 晨に積つて遊眺を展ぶ

孤客傷逝湍 孤客は逝く湍に傷しみ

徒旅苦奔峭 徒旅は奔る峭に苦しむ

孤客、徒旅といい、また傷、苦といい、詩人の感情を露わに現わしている。陳倩父が「遊目感を生じ、百端交々集まる」と指摘しているのは詩人の旅の憂愁をいったものである。

石浅水潺湲 石浅くして水潺湲たり

日落山照曜 日落ちて山照曜す

荒林紛沃若 荒林紛として沃若たり

哀禽相叫嘯 哀禽相叫嘯す

荒林といひ哀禽といひ、ここにも詩人の感情があらわに現われている。ここでも陳倩父の評を借りよう。即ち「荒林の荒字、哀禽の哀字、目に触るるもの、悲楚に非ざる無きを覺ゆ」である。石浅の二句も恐らく憂愁の情の含まれた表現と受けとるべきであろう。されば以上の叙景はすべて憂愁の情

— 7 — 謝靈運の「初めて郡を去る」詩

をたたえた抒情詩であるといえよう。詩人はかかる憂愁をかきたてる外物に遭って、彼の常に口にする感慨が起こる。

遭物悼遷斥 物に遭ひて遷斥を悼み

存期得要妙 期を存すれば要妙を得

既乘上皇心 既に上皇の心を乗り

豈屑末代詔 豈に末代の詔を屑りみんや

目覩嚴子瀨 目に嚴子瀨を覩

想屬任公釣 想は任公の釣に屬す

誰謂古今殊 誰か謂ふ古今殊なると

異代可同調 異代調を同じくす可し

周囲の風物をみて左遷の寂しさが悲しまれるという。しかし最後の彼の感慨は魏晉の抒情詩のように寂しき物思いで終ってはいない。隱遁こそすぐれた道であるという隱遁賛美に終っている。

右の詩は抒情詩であって、叙景には作者の感情が籠められており、その叙景によって次なる感慨が引き起されて来たものであるが、最後の感慨は必ずしも前の七里瀨の叙景には関係しなくても、彼の常に口にする隱遁賛美の口吻である。

一体彼の詩は殆んどが叙景を先にし感慨を後にする、時には更に先立つに感慨を以ってすることもあるけれども、叙景を先において感慨を後にするものが大部分である、またその叙景の多くは、いうまでもなく山水であり、その感慨の多くは、老莊の道の賛美か隱遁の賛美である。右の詩はその一例

であるが、先立つ叙景は憂愁の感情を現わす叙景でありながら、その感情は最後まで持続しない。途中で切れて、最後には隱遁賛美に終わる。これも謝靈運の詩の一特色であって、且つその特色は叙景と感慨との非連続なるが如き感じを、読者に与えることである。冒頭に挙げた「初めて郡を去る」詩は、その最も好適例といえよう。

「初めて郡を去る」詩に於て、やはり叙景の次に来るものは、隱遁の賛美である。「戰勝驪者肥」の句以下がそれである。これらの感慨が一見先立つ叙景と非連続の如く見えるのは、実はその感慨が概ね隱遁についてか、また老莊の道について述べているからである。この詩に於ては叙景の部はむろん何ら喜怒哀楽の情を感じさせるようなことは用いられていない。換言すれば風景を客観的に描写しているといっても差支えない。ただ次に来る感慨が悲哀憂愁などの感慨に関するものであるならば、前者の叙景必ずしも客観的叙景とは理解されぬであろう。次なる感慨が隱遁や老莊の賛美なればこそ、前者の叙景は浮立つて来る。たとい叙景部が「七里瀨」の如く抒情詩であっても、叙景部は叙景として強く読者に印象を与える。つまり叙景部は、それ自体独立して存在するかの如き印象を与える。その主なる原因は詩の最後を隱遁、老莊を歌うことを以って収めるからである。

なお謝靈運の詩には、叙景に先立つて感慨が述べられていくことがある。その場合でも必ず叙景の後は再び感慨が述

べられてゐる。冒頭に挙げた詩がそうである。また「過始寧墅」「登池上楼」「田南樹園、激流植援」「還旧園作、見顏范二中書」などがそれである。これらの詩の始めに来る感慨も概ね隱遁、老莊贊美の方向にある。喜怒哀楽の感情を示したものでない。

以上のように詩の始めにせよ終りにせよ、隱遁を歌い、老莊の道を口にするのは、彼の人生觀の那辺に在るかを示すものであるが、そうした老莊的的人生觀のみに重点を置いて歌っているのが、前代の晋の詩であり、蘭亭の詩などは、それを最も好く示している。こうした傾向にある詩と叙景詩とを接合させたのが謝靈運である。その接合の仕方は叙景を先にし感慨を後にしている。またそれに加えるに感慨を更に先立たせているものもある。その接合のしかたは、交錯させたり、重ねたりはしないで、継ぎ足してゆくしくみである。「初めて郡を去る」詩は最も好き例である。ところで主題のこの詩に再び返って来るがこの詩で作者は何をいわんとしているかと問えば、やはり念願稱って故郷に歸隱することのできた感慨を述べたもので、その背後に流れるものは隱遁贊美の人生觀である。そのなかに歸隱の途中の風景を挿入したもので、それは前後にあまり關係なく挿入されている。この詩の人を牽きつけるものは感慨、景、感慨という場面の轉換のあざやかさにある。一方から考えると景と感慨とが交錯しないように感ぜられることは詩の未熟さを思わせるかも知れない。後

世の杜甫の抒情詩に出て来る叙景とは程遠いものがある。しかしだからといって謝靈運の詩が価値なきものとは思われぬ。謝詩の特色の一つはその未熟さにある。景と感慨の対立している所にその特色がある。その対立こそ謝詩を山水詩といわしめた原因となっている。

彼の詩を後世山水詩と呼ぶ。しかし彼の詩自体は山水の描写のみに終始してゐるわけではない。山水の景の描写の後には、必ず感慨が洩らされており、その感慨の多くは隱遁、老莊に關することである。むしろ彼の歌わんとする主旨は最後の感慨にあつたのかも知れぬ。とすれば彼の詩は隱遁詩と名づけられ、老莊詩と名づけられることができる。つまり所謂玄言詩である。その玄言詩が何故山水詩と呼ばれるか。いうまでもなく前代には出現しなかつた新鮮な山水描写が突如詩中に現われたことが第一の原因である。それは当時の人々を魅了したこと想像に難くない。會稽に隱棲している頃の本伝がいう「一詩有りて都邑に至る毎に、貴賤競って写さざる莫し」とは、新鮮な山水美を描写した詩が、都會の人々の眼を奪つたものと思われる。しかもその歌い方が感慨と対立させ、交錯させぬことに於て、山水描写はより人々に強い印象を与えらる。もしその叙景が抒情的であつたなら、またその感慨が喜怒哀楽に關する抒情であつたなら、これほどまでに山水描写はめだちはしないであろう。謝朓の詩が謝靈運ほど山水が浮立って来ないのは、その叙景が抒情的なためである。

— 9 — 謝靈運の「初めて郡を去る」詩

以上「初めて郡を去る」詩を例にとり、謝靈運の詩の景と感慨との組み合わせのあり方を論じ、彼の山水詩としての一つの特色を明らかにした。

なお本稿はかつて畏友高木正一氏が発表された「謝靈運の詩風についての一考察」(立命館文学一八〇—橋本循先生古稀記念特輯—)の脚注のようなものであり、主要なる点については高木氏の論文に尽きている。